La Comédiathèque

隔離

ジャン＝ピエール・マルティネス

comediatheque.net

以下の戯曲のテキストは無料でお読みいただけます。
ただし、プロ・アマチュアを問わず、上演には著者の事前許可が必要です。
ジャン＝ピエール・マルティネスに連絡し、彼の作品の上演許可を得るには：
https://comediatheque.net

隔離

ジャン＝ピエール・マルティネス (Jean-Pierre Martinez)

見知らぬ男女4人が、突然隔離され、廃れた劇場に閉じ込められる。彼らは、想像上の双方向ミラーの後ろに座り、もう一つの集団（観客）に観察されている。

「ウイルスに感染している」とされる彼らは、この状況について考え始める。自分たちはどのようなウイルスに感染しているのか？彼らの運命はどうなるのか？このすべてがいつ、そしてどのようにして終わるのか？

物語が進むにつれ、この閉鎖された空間が近未来の「ビッグ・ブラザー」に支配される世界で展開していること、そして隔離の理由が必ずしも医学的なものではないかもしれないことが明らかになっていく。

登場人物

ドム
パット
マックス
サム / キム

登場人物の性別は重要ではなく、全てのキャラクターがジェンダーニュートラル（または完全に統一された）外見を持つことが特徴であるべきです。役者たちは劇中で役を交代することも可能であり、各役柄は衣装によって表現されます（患者は青、ピンク、または緑の病院用ガウン、看護師は白い実験用コートまたは黒い毛沢東風のシャツ）。このバージョンでは、ドムとマックスは男性であり、パットとサム／キムは女性という設定です。

第１幕

舞台は空っぽのままでいいが、椅子が1、２脚あってもよい。ドムが登場し、不安そうにしている。彼は病院の患者が着るガウン（青、ピンク、緑のいずれか）を着ている。周囲を見回し、興味を示しているが、観客を発見して驚く。彼は観客の方に歩み寄り、不安げな表情で観察している。パットが後ろから同じガウンを着て登場する。

パット – こんにちは。

驚いて、ドムは飛び上がり、振り向いてパットに気づく。

ドム – 驚かせないでよ…。

パット – ごめんね…。あなたも、もしかして…？

ドム – そうだよ…。

ぎこちない沈黙。

パット – どこかで会ったことある？

ドム – 同じ車両にいたと思う。

パット – そうだ、13 号車！これって何か関係あるのかな…。

ドム – 関係？13 という数字のこと？

パット – いや、そうじゃなくて、今ここにいる理由がさ。同じ車両にいたからじゃないかって…。

ドム – どうだろうね。正直、ここにいる理由は全く分からない。

パット – 私もさ。何が起きているのか全然分からない。電車を降りたら、警官が２人来てついて来いって言われて…。

ドム – それって本当に警官だった？

パット – 多分ね…。マスクをつけてたけど。でも病院で使うマスクみたいなやつで…。

ドム – それで救急車に乗せられたってこと？

パット – 救急車かどうか…。あ、いや、警察車両だったのかも。

ドム – 医療器具がある警察車両？

パット – そうそう…。それでここまで運ばれて、「待て」って言われたんだ。君は？

ドム – 同じだね…。だから君も何も聞いてないんだ。

パット – 「待て」ってだけ言われた。

ドム – それで…他に何も聞いてない？

パット – うーん…（間）いや、1つだけ。「隔離」という言葉を聞いた気がする。

ドム – ああ、そう…。

パット – 君も聞いた？

ドム – 特に聞いてないけど…。

パット – でも、それっぽくない？

ドム – 隔離…か。確かに、それ以外考えられない。

パット – マスクをつけてたのも説明がつくよね。

ドム – そうだね…。じゃあ、今はどうする？

パット – 待つんだよ…。言われた通りにね。「待て」と。

間が空く。

ドム – 隔離か…。通常40日間くらいだけど、それまでには何が起きてるのか分かるといいね。

パット – まあ、「隔離」って言っても40日間じゃない場合もあるけどね。病気によるし。

ドム – 病気ってこと？

パット – それ以外何がある？隔離されてるってことは…。

ドム – うん…ウイルスかな。

パット – 感染力が強いやつだね。

ドム – そう…きっとそうだ。

パット – 僕は今のところ何の症状もないけど、君は？

ドム – 僕もないね。

パット – でもまあ…それだけじゃ何とも言えない。潜伏期間中かもしれないし。

ドム – 君、医者なの？

パット – データ収集家だよ。

ドム – データ収集家？

パット – 昔で言うソフトウェアエンジニアってやつかな。

ドム – なるほどね…。それでウイルスに詳しいんだ。

パット – 主に子どもが３人いるからかな…。君は？

ドム – 子どもはいないよ。

パット – いや、そうじゃなくて…君も医者じゃないよね？

ドム – 僕はトレーナーだよ。

パット – トレーナー…。

ドム – 昔で言う教授ってやつさ。将来、俺たちのことをどう呼ぶのか分からないけどね…「ハンドラー」とか。

パット – なるほど…。

ドム – 本当に？何が「なるほど」なの？

パット – いや、その…君、僕よりウイルスについて詳しくないみたいだね…。

間が空く。

ドム – それで、潜伏期間ってウイルスによって違うの？

パット – その通りさ…。感染してから症状が出るまで１週間くらいかかる場合もあるし、もっと早い場合もあれば遅い場合もある。

ドム – 医者でもないのに、なんだか流行病に詳しいみたいじゃないか。

パット – 言っただろ、子どもが３人いるって。１人が病気になると、数日後には他の２人も同じ病気にかかるんだ。

ドム – でも、俺たちは病気じゃない！

パット – 病気になる前に感染力がある場合もあるんだよ。

ドム – それは、もし本当にウイルスを持っていたらの話だろ。

パット – だから隔離されてるんだろうね…多分。でも、いずれちゃんと説明してくれるさ。

ドム – そうだね、きっと説明してくれるよ…。

マックスが登場する。彼も同じガウンを着ている。

ドム – ああ…人数が多いほうが賑やかでいいね…。

パット – 賑やか？

ドム – 昔よく言ってたんだよ、「人数が多いほど楽しい」って…。まあ、気にしないで。

パット – この紳士が、何か教えてくれるかもしれないよ。

マックスは困惑した様子で、観客のほうへ数歩進む。

ドム – あんまり期待できそうにないね。彼、ちょっとぼーっとしてるみたいだし。

パット – こんにちは。

マックス – あ…こんにちは…。僕も今来たばかりなんだ…。

ドム – 僕たちが来たばかりだとどうして分かるんだ？

マックス – え？

ドム – 「僕も今来たばかりだ」って言ったよね？僕たちがいつ来たかなんて分からないはずだろ？もしかしたら、僕たちは何週間もここにいるかもしれないじゃないか。

マックス – 君たち、何週間もここにいたの？

パット – 今来たばかりだよ。

マックス – ああ…じゃあ僕と同じだね…。だからそう言ったんだよ。

パット – そうだね…。

マックス – それで…ここにいる理由、分かる？

ドム – 君が教えてくれると思ってたんだけど…。

マックス – 全然分からない…。電車を降りたら待ち構えられてて、何の説明もなくここに連れて来られたんだ。こんなことしてる暇なんかないのに。

パット – 分かるよ…。僕なんか子どもが３人待ってるんだ。それに夫もね。それで君は？

マックス – いや、僕は結婚してないよ。南部で数日間過ごして、入院中の母を見舞いに行ってたんだ。

ドム – お母さんも病気なの？

マックス – 股関節を骨折したんだ。

パット – それなら少なくとも感染しないね…。

マックス – そうだけどさ、僕の収入はどうなるんだ？今週末までに仕上げないといけないクライアントのプロジェクトが２件あるんだよ。

パット – もしかしたら時間分の補償が出るかもしれないよ。君は職人なの？

マックス – 配管工だよ。

ドム – 今は必要ないって時に限ってね…。

マックス – 何だって？

ドム – いや、なんでもないよ…。

パット – 配管工…聞いたことはあるけど、どんな仕事だったか思い出せないな。

ドム – 今は「フィクサー」って呼ばれてるんだよ。

パット – ああ、そうか…。

ドム – つまり、この紳士は専門的なフィクサーってわけだ。彼はパイプとか、ワッシャーとか、蛇口とかを直すんだ。昔は配管工って呼んでたけどね。

マックス – その通りだよ。

ドム – それで君も、ここに閉じ込められた理由を知らないってこと？

パット – 閉じ込められてると思うの？

ドム – 閉じ込められてるかどうかはともかく、隔離中なら外に出られないよね？

マックス – 隔離されてると思うの？

ドム – この経験豊富な専門家（彼女）によると、僕たちはウイルスに感染していて、感染力があるんだ。それで隔離されてるってわけさ。

マックス – ウイルス？どんなウイルス？

パット – いい質問ね…。おそらく新しいウイルスよ。もし既存のものならワクチンがあって、隔離されることもないだろうし。

マックス – なるほどね…。でも、どうして僕たちなんだ？理由は分かる？

パット – 感染者と知らずに接触したのかもしれない…。さっき、病院にお母さんを見舞いに行ったって言ったよね？

マックス – 彼女は股関節を骨折してるんだよ！

パット – そうだけど、病院ってウイルスの温床でしょ？誰だって知ってることじゃない？

マックス – なるほど、今度は僕のせいってわけか…。

ドム – 落ち着けよ。誰も君のせいだなんて言ってないだろ。

パット – 何週間もここにいることになるかもしれないんだから、お互い支え合うべきよ。

マックス – 何週間もここにいると思うの？

パット – 分からないよ。今は何も分からないんだ。

間が空く。

マックス – で、君たちは体調どう？

パット – なんとかやってるわ…。家に帰って夫や子どもたちと一緒にいたかったけど、大丈夫よ…。

マックス – いやいや、そんな話はどうでもいいんだよ。つまりさ…何か症状が出てるかってことだよ。

パット（気を悪くして） – 今のところは何もないわ。

マックス – そっか…。君は？

ドム – 僕は元気だよ。聞いてくれてありがとう。

マックス – 僕もだよ…今までで一番元気かもね。

ドム – 素晴らしい、本当に素晴らしい…俺たちも君のことを本当に喜んでるよ…

マックスは再び周りを見渡す。

マックス – ところで、ここがどこか誰か知ってる？

ドム – いや…俺たちを運んできた霊柩車の中からは見えなかったんだ。カーテンが閉まってたし。

マックス – 霊柩車だったのか？本当に？

ドム – そう言ったっけ…？悪い、救急車の間違いだよ、もちろん。

パット – 移動はせいぜい 15 分だったわ。だから駅から遠くないはずよ…。

マックス – そうだな…でもここ、病院じゃないよな。

パット – その通り…。でもまだ病気になってるわけじゃないし。

マックス – この場所、変だな…ここって何なんだ？（*ステージの端を歩き回り、観客に気づいて顔が凍りつく*）あれ、誰だ？

パット – 誰のこと？何の話？

マックス（*観客を指さして*）– あそこだ！

パットは近づき、目を細める。

パット – 何も見えない…ライトがまぶしくて…。

マックス – あそこ！あの人たち！俺たちを見てる！

パット（*ついに観客に気づく*）– 信じられない…。あれ、何なの…？（ドムに向かって）これ、見た？

ドム – ああ…入った瞬間に気づいたよ。

パット – 言ってくれればよかったのに！

ドム – 何て言えばよかったんだ？

パット – 私たちが見られてるとか、誰かが盗み聞きしてるとか！

ドム – 頭から抜けてた…それに、だから何だって？俺たち、何かしたわけでもないし。言っちゃいけないことも言ってないだろ…？

パット – そうだといいけど…。

マックス – 俺は何も言ってないよ。

パット – これ、悪夢だ…。

マックス – あいつら、俺たちの声聞こえてると思うか？

ドム – それが目的なんじゃないかな。

マックス – 俺たちの話を聞くために？

パット – 少なくとも観察するためね。私たちが監視されてるんだもの。病気の進行をモニターするために…。

マックス – 変だな、俺たちにはあいつらの声が聞こえない。

ドム – たぶん、あいつらは何も言ってないんだよ。

パット – あるいは、何かガラス越しなのかもね。

マックス – ガラス？

パット – ほら、取調室にある二方向ミラーみたいなやつよ…（ライトをじっと見つめながら）だから顔に向かって直にライトが当たってるのよ…。

ドム – 俺、取調室に入ったことないんだ。今日以前はね。

パット – でもわかるでしょ。正しい側にいれば、向こうの部屋にいる人たちが見えるのに、向こうからはこっちが見えないの。

マックス – どんな人たち？

パット – 容疑者よ！

マックス – でも、ここでは俺たちからあいつらが見えるんだよ。

ドム – 一つだけわかることがある。もし取調室に入る羽目になったら、俺が「正しい側」にいることはまずないだろうな。

マックス – 正しい側…？それはどっちだと思う？

ドム – ガラスの正しい側さ！こっちからは見えて、向こうからは見えない側だよ。

マックス – ってことは、向こうが尋問されるってことだ…。で、俺たちは証人ってわけだな。

パット – それじゃ筋が通らないわ。私たちは警察じゃないんだから…。

ドム – 君がそう言うならね…。

パット – 何ですって？

ドム – 君は取調室についてやけに詳しいじゃないか…。

パット – それってどういう意味？

ドム – さあな…。でも君、ウイルスのこともずいぶん詳しいみたいだし、取調室がどんな場所かも知ってるし。何か隠してることがあるんじゃないのか？君をここに送り込んだのは、まさか…。

パット – 「彼ら」？どういうこと？

マックス – 君が潜入捜査官かもしれないって、この紳士が言いたいんだよ。スパイ、というのがしっくりくるかな…。

パット – 私たち全員、だんだん頭がおかしくなり始めてるんだと思うわ。この人たちは医者に違いないわ。私たちの感染の進行を記録するためにここにいるのよ。自分たちが感染しないようにね。

マックス – 無視するのが一番だよ。

ドム – その通り。そうしよう。俺たちは無視するんだ。まるで俺たちが実験室のモルモットで、昼も夜も百人の専門家に監視されながら、俺たちが死ぬ時とその方法について議論されているかのように…無視しようじゃないか。

同じガウンを着たサムが後ろから入ってくる。

サム – こんにちは…。

パット – この方なら何か教えてくれるかも…こんにちは、あなたはお医者さんですか？

サム – 私は「情報提供者」です。

パット – 情報提供者？

ドム – 昔でいうところの「ジャーナリスト」ってやつだな。

マックス – ああ…じゃあ、君も俺たちみたいなもんだね。

サム – あなたたち、全員が情報提供者なんですか？

マックス – いや…俺が言いたいのは、君も俺たちと同じように、どうしてここに連れてこられたのかわかってないってこと。

サム – そうね、ごめんなさい。でも全くわからないの。電車を降りた時に…

ドム – はいはい、それはもう知ってるよ…。

サム – 質問に答えただけでしょ…。知ってるなら聞かないでよ。

マックス – でも俺たちは知らないんだ！今言っただろ！

サム – 落ち着いて、そんなに怒る必要はないわよ。

マックス – ごめん、君が正しいよ。

サム – それで、電車を降りたら警官にここへ連れて来られたの。それ以外は何も知らない。本当に、どうして逮捕されたのか全くわからないわ。

ドム – 君に逮捕されてるって言ったのか？

サム – はっきりとは言われなかったけど…。

パット – 私、「隔離」って言葉を聞いた気がする。まあ、そう理解しただけかもしれないけど。

サム – たぶん、彼らは「warrant in（逮捕令状）」と言ったのかもね…。

ドム – 話がややこしくなってきたな…。

サム – もし私たちが警察の管理下にいるなら、それ相応の理由があるはずよ。

ドム – おや、じゃあ俺たちは今「警察の管理下」にいるってわけか？

サム – ごめん…観察下に置かれているって言いたかったんだ…

パットが声を低くし、公衆に向かってこっそりと指をさす。

パット – じゃあ、あそこに座って無言でこちらを見ている人たちが誰なのか、あなたも知らないのね？

サムは観客に気付くが、驚いた様子は見せない。

サム – 知らないよ。

マックス – じゃあ、君も同じ電車に乗ってたんだね？

サム – 13 号車、40 番席。君は？

パット – 42 番。

マックス – 41 番。

ドム – 43 番。

サム – ということは、僕たちは隣同士か向かい合わせに座っていたわけだね。

パット – それなら、同じ人から感染された可能性があるってこと？…でも誰に？

サムが他の人たちを疑いの目で見る。みんな困惑した表情。

パット – このガウン姿を見てよ。精神病院の患者みたいじゃない？

マックス – でも、狂気は伝染しないだろう…だよね？

サム – それでも、身体的な接触は避けた方がいいね。

ドム – ああ、触れるつもりだったのか？

パット – 咳も避けた方がいいと思うわ。咳をする時は口を覆わないと。

ドム – でも、感染してるならどうしてマスクを配らなかったんだ？

パット – 私たちだけだから無駄だと思ってるのかも。もう運命が決まっているなら…

サム – 運命が決まっている？

パット – ごめん、感染しているって言いたかったの。

マックス – それなら、咳をする時に口を覆うのも無駄だよね。

ドム – それじゃあ、触れてもいいのか？

サム – まずは自己紹介しようよ。(*ドムに手を差し出す*) サムだ。

少し迷った後、ドムがサムの差し出した手を握る。

ドム – ドムだ。

他の人たちも同じようにする。

パット – パットよ。

マックス – マックスだ。

みんな少し不安そうに握手を交わす。突然、スピーカーがガサガサと音を立て、声が聞こえ始める。

声 – みなさん、こんにちは。聞こえますか？

一瞬の不安が漂う。

サム – 聞こえるよ。応答してる。はっきりとは聞こえないけどね。

ドム – そうだな、はっきりというより音量だけ大きい感じだ。

声 – まず最初に、この状況でご迷惑をおかけしていることをお詫びします。しかし、この健康危機に対応するためには、どうしても必要なことなのです。迅速な対応が求められました。そのため、皆さんの拘束...いや、隔離場所への収容の理由を十分に説明する時間がありませんでしたが...

パット – それで、具体的にどんな健康危機なのか教えてもらえますか？

声 – スピーカー越しに説明するのは少し難しいのですが、ご心配なさらないでください。すぐに誰かをお送りして説明させます。それまでは、皆さんが快適に過ごせるように万全を尽くします。エントランスホールには冷蔵庫と十分に備蓄された食料庫があります。好きなものを取ってください。さらに、廊下に通じるドアがあり、その先にはそれぞれバスルーム付きのベッドルームと、完全に備え付けられたミニバーがあります。簡素なものですが、必要なものは揃っていると思いますよ...

ドム – 必要なものって具体的には？

声 – テーブルサッカーもありますよ。

マックス – でも、少なくともどれくらいここにいるのか教えてくれないか？

パット – 家で夫と子どもたちが待ってるのよ。心配してるわ。少なくとも子どもたちは…。

声 – ご家族、雇用主、そしてクライアントの皆様にはすでに通知済みです。どうぞ快適にお過ごしください。またお話ししましょう。

パチッという音が聞こえ、それから何も聞こえなくなる。

パット – 「快適にお過ごしください」って？

ドム – ほら、聞いたろ…黙って待てってことさ…。

サム – それはおかしいだろ…。

全員が驚いている。

パット – 夫に電話するわ。せめて無事を知らせないと。（*携帯電話を取り出す。*）それに、もっと情報が得られるかもしれないし…。（*ボタンを押すが、顔が固まる。*）圏外だわ…。君たちは…？

ドム – （*携帯を取り出しながら*）僕もだ。

サム – ジャマー（*妨害装置*）を使ってるのかも…。

マックス – なんでそんなことをするんだ？

皆、困惑している。

パット – つまり、本当に外の世界と隔絶されてるってことね…。

ドム – どうする？

サム – どうすればいいと思う？

間が空く。

マックス – とりあえず、食事を試してみよう。

ドム – 何だって？

マックス – 食事の場所を教えてくれただろ。

ドム – 理由も分からずに監禁されて、外部との通信手段もないのに、君が最初に考えるのは…食事？

マックス – 他にいい考えがあるのか？

ドム – いや…。

マックス – なら、好きにすればいいさ。僕は腹が減って馬でも食べられそうだ…。

彼は去る。他の人たちは顔を見合わせる。

サム – 実は、僕もちょっと小腹が空いてきた…。

彼も去る。

ドム – 君はどう思う？

パット – 結局のところ…餓死する必要はないでしょ？

彼女も去る。少し迷った後、彼も後を追う。

暗転。

第２幕

照明が再び点く。ドムとパットは檻の中のライオンのように行ったり来たりしている。マックスは無関心な表情で彼らを見つめながら、ピザを一切れ食べている。

パット – 前に４人いなかった？

ドム – ああ、いたよ…。

パット – ４人目がいなくなった…。

ドム – 名前なんだっけ？

マックス – キムだよ。

パット – キム？

ドム – サムじゃなかった？

マックス – ああ、そうだ、サムだ…。

ドム – 彼女に何をしたんだ？

マックス – もしかしたら解放されたのかもな。

パット – 解放された？じゃあ私たちはどうなるの？

ドム – それか、死んだか…。

パット – 死んだ？つまり…この病気で？

ドム – 分からない。（*マックスに向かって*）君はどう思う？

マックス – ああ、死んでるかもな。

パット – 食欲が失せないのが不思議だわ…。

間が空く。

ドム – どれくらいここにいる？

パット – １週間くらいじゃない？

マックス – 正確に言うと７日だ。

パット – そう、それが言いたかったの…。１週間よ。頭がおかしくなりそう。

ドム – 僕もだ。

パット – まだ完全にはおかしくなってないけど、確実にその方向に向かってる。

マックス – こうして観察されてるのは良いことだな。

ドム – 観察してるって、誰が？

マックス – あいつらさ。保健当局だよ。スピーカーでそう言ってただろ？君たち聞いてなかったのか？

パット – あれはただのスピーカーの音声よ…。

ドム – 確かに。実際、何が起きてるか本当に分かってるのか？もしかしたら、誘拐されたのかも…。

マックス – 警官に？

パット – 本当に警官だったのかどうかも怪しいわ。彼らはマスクをつけてたし…。

マックス – でも、なんで誘拐するんだ？

ドム – 家族に身代金を要求するためとか？僕には家族なんていないけど…。君たちも億万長者ってわけじゃないだろ？

パット – 私はマンションしか持ってないけど、それも厳密には銀行のものよ。ローンを 50 年かけて返済するまではね。銀行が私の身代金を払うなんて考えられないわ…。

ドム – それに、身代金の要求もまだされてないしな。

マックス – 少なくとも僕の知る限りでは。

ドム – 誘拐犯も、僕たちに価値がないって気づいて諦めたんだろうな。そして、解放するのを忘れた…。

パット – それか、これは人質事件かもしれないわ。こういうのってすごく長引くことが多いし。場合によっては何年も。

マックス – 人質事件だって？

パット – 何が不思議なの？要求を突きつけて、当局がそれを満たさないと私たちを殺すって脅してるんじゃない？

マックス – もしそうなら、運が悪かったな。

ドム – 君は？

マックス – いや、つまりさ…俺たちだよ。俺たちが運が尽きてるんだ。当局は何年も前からテロリストとの交渉をやめてるんだ。人質の命が危険でもね。

間が空く。

パット – 私たち、話がどんどんおかしくなってきてる気がするわ…。ただの単純な隔離でしょ。それだけよ。

ドム – そう思う？

パット – ええ、そう信じることにしてるの。それなら、頭がおかしくならないから…。

マックス – 君の言う通りだ。最悪な方向にばかり目を向けるべきじゃないよな。

パット – 聞いて、誰も病気になってない。それが一番大事よ…。本当に隔離なら、いずれ私たちを解放するはずだわ。

マックス – どうして俺たちだけが死者だと思う？

ドム – 死者？君、感染者のことだろ。面白いフロイト的失言だね。

パット – ただの言い間違いよ。それで何が言いたいの？

マックス – 分からない…。何も意図してなかった…。君はどう思う？

ドム – 何も思わないね。それに、もし思ったとしても君には言わないよ。

パットが観客のほうを向く。

パット – あの人たちはどうなのかしら…。まだここにいるわね…。

マックス – もしかしたら彼らも出られないのかも。

パット – 私たちと同じように人質なの？

ドム – もし彼らが自由に出られるなら、どうしてまだここにいるのか全然分からないね。

マックス – だよな…。ここで何か面白いことが起きてるわけでもないのにさ。

パット – まるでリアリティ番組みたい。私たちもすぐに飽きるわね…。

サムを演じていたのと同じ俳優がキム博士として舞台に登場する。彼女は黒いマオカラーシャツを着ており、テレビ司会者のように笑顔を浮かべている。

キム – こんにちは！親愛なる皆さん！

３人が驚いて振り向く。

パット – 彼女、私たちみたいな病院用ガウンを着てないわ。お医者さんに違いない。

ドム – 変だな…。どこかで見たことがある気がする。

パット – 私も。以前どこかで会った気がするわ。

マックス – 彼女なら、ここで何をしてるのか説明してくれるかも…。

ドム – やっとだな！

パット – こんにちは、先生。それで、私たちは自由になれるんですか？

キム – まだそこまではいかないわね…。

ドム – じゃあ、まず君が誰で、なぜ私たちがここにいるのか教えてくれないか？

キム – 私は…あなたたちのリフォーマーよ。

パット – リフォーマー？

キム – あなたたちを立ち直らせるためにここにいるのよ。

ドム – 昔はセラピストって言ってた気がするけど。

パット – でも、あなた医者なの？

キム – まあ、一応ね…。私はキム博士よ。そして、あなたたちを治療するためにここにいるの。

ドム – 治療？

キム – そうね…正しい道に戻すため、と言えばいいかしら。健康への道にね…。

パット – それで、どうやって？

キム – どう思う？再フォーマットするのよ。手遅れじゃなければね…。

パット – ワクチンはないってことね。

マックス – 完璧だな。安心したよ…。

パット – でも、どうして私たちをここに閉じ込めてるの？今こそ理由を教えてほしいわ。

キム – あなたたちは危険な人物と接触していたのよ。

マックス – 君が言ってるのは…危険なウイルスに感染した誰かってこと？

キム – ええ、そんな感じね。あなたたちが感染しているかどうか確認中なの。

ドム – でも、治療は何も受けてないぞ！

キム – 知られている治療法がないのよ。

ドム – つまり、医療的な治療はないってこと？

パット – もちろんだ。だって僕たちには症状がないんだから！

キム – この病気は潜伏期間が非常に長いかもしれないのよ。

ドム – もし僕たちがそのウイルスに感染していると分かったら、君たちはどうするんだ？

キム – 指示を待っているところよ。

ドム – 僕は、使い古されたハードディスクを積んだロボットと話してる気分だ。君のほうがウイルスに感染してるんじゃないのか？

パット – 私が知ってるのは、私たちが１週間もここに閉じ込められて、家族と連絡を取ることもできないってことだけよ…。

ドム – 電話ですらできないんだ！

パット – ネットワークが妨害されてるのよ。電話でウイルスを広げるなんてできる？

キム – ウイルスによるけどね…。

パットが観客を指さす。

パット – あの人たちが私たちをじっと見つめてるのは何なの？

キム – 彼らもモルモットよ。

パット – モルモット…つまり、私たちもモルモットって認めるのね。

キム – あなたたちのように重度に感染した患者との接触後の反応を研究したかったのよ。

ドム – でも、僕たちは彼らと接触してないぞ！

キム – いいえ、でも彼らはあなたたちの声を聞けるし、あなたたちを見ることもできるの。

マックス – なんだか実験室のハムスターみたいだな。

パット – 運動用の回し車でもあればいいのにね。

キム – これは遊びじゃないのよ、信じてちょうだい。

パット – 一体何なのよ、このウイルスって？

キム – 実を言うと…それは本当のウイルスではないのよ。

マックス – じゃあ、何なんだ？

キム – どちらかと言うと、音声や視覚を通じて感染するものね。あるいはその両方。ある意味、模倣によって広がるの。

ドム – なるほど、それなら話が少し見えてきたよ。

キム – 13号車の誰かが、あなたたちの目の前で不適切で、場合によっては逸脱した行動をしたの。それがリスクを生んだのよ。

パット – どんな行動なの？

キム – 本当に覚えてないの？

パット – 覚えてないわ。

キム – 誰か覚えてる？

ドム – いや、覚えてない。

キム – それは見てみないとね。あなたたちがここに閉じ込められているのは、あなたたちが感染力を持っていないか確認するためよ。

パット – 感染力？でも、ウイルスじゃないって言ったじゃない！

キム – そうね…もっと分かりやすく言うなら、あなたたちがその危険な行動を再現しようとしないか確認するためよ。他人を感染させるリスクを避けるためにね。

パット – それで、いつになったら私たちが「感染者じゃない」って確信できるの？

キム – それもまだ指示待ちよ。今は、とにかく思い出してみて。

サム – 何を思い出せって言うんだ？

キム – 13号車で見たり聞いたりしたことよ。少し考える時間をあげるわ…。

パット – でも…。

キム – 今日のところはここまでよ。親愛なる皆さん、またすぐにお会いしましょう。その間に、何か必要なことがあれば遠慮なく知らせてね。

パット – 知らせる？どうやって？私たちはここに閉じ込められてて、外の世界と連絡を取る手段なんてないのよ！ルームサービスすら呼べないのに…。

キム – 心配しないで…求めよ、さらば与えられん。探せば、見つかるわ…。

ドム – 叩けよ、さらば開かれん？

キムが退場する。

パット – 「思い出してみて」…。

マックス – 何か覚えてるか？

ドム – いや…。君は？

パット – 私も…。

ドム – それに、たとえ覚えてたとしても、口にしないだろ？

マックス – どうして？

パット – （*観客を指差して*）見られてるってことを忘れちゃいけないのよ…。

ドム – 忘れる心配はないな。

マックス – 見られてると分かってると、逸脱した行動は避けるだろ？

ドム – そもそも逸脱した行動って何だ？

パット – 何に比べて「逸脱」なの？

マックス – 分からない…。

パット – もう何も分からなくなってるわ…。

ドム – 一度は知ってたはずだ…。でも忘れてしまったんだ。

間が空く。

マックス – 考えすぎたら腹が減ってきたよ。君たちは？

マックスが退場する。

パット – あの人、本当に単純な人ね。

ドム – あいつが俺たちを見張るためにここにいるんじゃないかと思い始めたよ。

パット – でも、私たちはすでに見張られてるわよね？

ドム – 内側から見張ってるって意味さ。

パット – スパイ？私たちの中の誰かがスパイってこと？

ドム – その通りだ…。もしかしたら俺がスパイかもな？

パット – いいえ、あなたは違うと思うわ。

ドム – じゃあ、君がスパイで、俺から情報を引き出そうとしてるのかもな。

パット – それなら、私はあまり優秀なスパイじゃないわね。だって、あなた何も話してくれないもの。

ドム – ただ慎重にしてるだけだよ…。

パット – 分かったわ、じゃあ私が話すわね。

ドム – 好きにすればいいさ。

パット – 何も覚えてないって言ったけど…それは完全に本当じゃないの。

ドム – 本当か？

パット – 何か覚えてるのよ。

ドム – 聞かせてくれよ。（観客を指差して）みんなで聞かせてもらおう、僕たち全員…。

パット – 電車で隣に座ってたカップルのことを覚えてるの。

ドム – ああ、そうなのか…？

パット – その男性が奥さんに話を始めたのよ。

ドム – 話？

パット – クレイジーなジョークをね。

ドム – 聞くのが待ちきれないな。

パット – ある男が鏡を見つけるの。そしてその鏡を覗いて、自分の姿を見て言うのよ。「あの野郎、前に見たことある気がする…」って。そしたら友人がその鏡を取り上げて覗き込んで言うの。「そりゃそうだよ、それは俺だもん！」

ドム – それがクレイジーなジョークだって？

パット – そうよ。そんな無意味なジョークを話すなんて正気じゃないでしょ。ずっとそう教えられてきたじゃない？

ドム – 確かに…。

パット – それに、この話、前に聞いたことがあるでしょ…。

ドム – 多分な。

パット – 私と同じ場所で聞いたのよ、電車の中で。

ドム – そうかもね。それがどうしたって言うんだ？

パット – 女性の顔が…しかめっ面になったのよ。彼女は痙攣し始めて、体全体が震えだしたの。そして口を開けて、短い声をいくつか出したのよ。

ドム – 声？どんな声だ？

パット – ハ、ハ、ハ！

ドム – ハ、ハ、ハ？

パット – ハ、ハ、ハ！

彼女は少しヒステリックに笑い始める。

ドム – 頼むから、声を抑えてくれ…。それで？

パット – 彼女は苦しんでいるようには見えなかったわ。彼は彼女を見て、それから同じ症状を示したの。

ドム – じゃあ本当に感染するってことか。それで？

パット – それで警官が来て、２人を連れて行ったのよ。

ドム – なるほど…。

パット – そうよ、分かるでしょ？だって一緒にそこにいたじゃない。

ドム – 覚えてないんだ…。

パット – 私はスパイじゃないわよ。話してくれてもいいのよ。

間が空く。ドムは彼女を舞台の奥、観客から離れた場所に連れて行く。

ドム – それは「笑い」と呼ばれるものだよ。

パット – 何が？

ドム – 君が今言ったその感染症のことさ。その症状は「笑い」と呼ばれるんだ。

パット – 笑い？それは何なの？

ドム – 保健当局が根絶することに成功した病気だよ。まあ、完全には無理だったみたいだけどね。

パット – でも、それはどんな病気なの？

ドム – とても古いものさ。人類と同じくらい古いんだ。その症状自体は比較的無害だけど、感染した人は秩序を乱すような行動を取る傾向がある。彼らが言うところの「逸脱した」行動をね。

パット – でも、さっき同じ話をしたのに、あなたは笑わなかったわ。

ドム – 二度目はそれほど面白くないものさ。それに、僕たちは笑う習慣を失ったんだ。何が面白いのか分からなくなったんだよ。

パット – 面白い？

ドム – そうさ。「面白い」や「滑稽な」もの。それが笑いを引き起こすんだ。でも、もう僕たちは笑い方を知らないんだよ。

パット – それで、あなたは？時々…笑ったりするの？

ドム – 秘密で、って意味かい？だって、そうしないと…君も見ただろ、笑っているところを見つかったらどうなるか。

パット – それで？

彼は彼女に近づき、非常に小さな声で話す。

ドム – 僕はあるグループの一員なんだ。

パット – テロリストのグループ？

ドム – ああ、そんな感じさ。秘密の会合を開いて、ジョークを言って笑うんだ。まあ、笑おうと努力するんだけどね…。

パット – クレイジーなジョークを？

ドム – 権力者や我々の「最高指導者」を笑いものにするには、クレイジーでないといけないのか？

パット – でも、権力者を批判することは厳しく禁じられてるじゃない。それに、最高指導者に対する不敬は冒涜よ。

ドム – 昔は冒涜は違法じゃなかったんだよ。

パット – どうしてそんなこと知ってるの？

ドム – 本を見つけたんだ。

パット – 本？

ドム – あと新聞もね。

パット – それって何？

ドム – タブレットみたいなものだけど、文字は紙に黒いインクで印刷されてるんだ。

パット – 梱包材みたいなもの？

ドム – しかもネットワークで共有できないから、当局がそれを管理できないんだ。

パット – もちろん、それは違法ね。

ドム – かつては違法じゃなかったんだ…。別の時代だったよ。

パット – 私には覚えがないわ。

ドム – 誰も覚えてないよ。当局が忘れさせるためにできる限りのことをしたんだ。たとえば、本を全部燃やしたりね。

パット – この「笑う」ってことだけど…。

ドム – 「笑うことは人間の本質だ」って、昔の人は言ったもんさ。それが、ハチやアリ、シロアリのような他の社会的動物と私たちを区別していたんだ…。

パット – 知性もあるじゃない？

ドム – でも、それがどれくらい長続きするかね…。教授はトレーナーになり、政治家はリフォーマーになり、ソフトウェアエンジニアはデータ収集者になった。そして、彼らがコンピュータそのものになるのも時間の問題さ…。

マックスが戻ってくる。二人はすぐに話をやめ、何事もなかったかのように振る舞う。

パット – 美味しい食事だった？

ドム – どうだった？

マックス – 最高だったよ。

パット – 今日のメニューは？

マックス – ピザだ。

ドム – またか？

パット – いつまで私たちを閉じ込めて、ピザを食べさせ続けるのかしら…。

マックス – 僕はピザは嫌いじゃないけど。

ドム – もし逃げたらどうなるかな？

マックス – 逃げる？それって許されるのか？

ドム – いや、もちろん許されないさ…。冗談だよ。

マックス – 当然許されないさ。それに、外の世界で他人を感染させる危険もある。

ドム – 観客を含めてな。今はあまり笑ってないけど…。

マックス – それに、すぐ見つかるだろうさ。

ドム – それじゃあ…どうすればいいんだ？

パット – ピザ、まだ残ってる？

マックス – 冷凍庫がピザでいっぱいだよ。電子レンジで温めればいいだけさ。

ドム – 僕も一緒に行くよ。

ドムとパットが退場する。キムが戻ってくる。

キム – それで？何か聞き出せた？

マックス – 何も…。自分が優秀な密告者なのか疑問に思えてきたよ…。

キム – 私も同じく…。とはいえ…君の意見を聞かせてくれる？

マックス – 意見？

キム – どう思う？

マックス – 何も思ってないよ、ボス。だって、考えすぎると危険だっていつも言ってたじゃないか…。

キム – 問題ないわ。彼らのファイルはもう揃ってるから。

マックス – 僕のファイルもあるの？

キム – もちろんよ！警察に自首して報奨金を得ようとした時に、君自身が書いたでしょ？覚えてる？

マックス – 覚えてるさ…。その結果、矯正キャンプで 10 年過ごして、「正しい道」に戻されたけどね。

キム – 君みたいな人がもっといれば、私たちはずっと問題が減るのよ、信じてちょうだい。

マックス – ボス、本当にこの人たちが危険だと思ってるの？

キム – まだ疑ってるの？

マックス – いや、もちろん疑ってないさ…。

キム – 君が何も聞き出せないなら、もう一度自分の報告書を書いてもらうわ。君の逸脱した考えをすべてリストアップして。明日の朝、私の机に提出してね。

マックス – 分かったよ、ボス。

マックスが周囲と観客を見回す。

キム – 今、何を考えてるの？

マックス – 何も考えてない、約束するよ。

キム – 君、何か考えてるのが分かるわ。それは何？

マックス – ちょっと気になったんだ…。ここって何の場所なんだ？

キム – 廃れた劇場よ。

マックス – 劇場？

キム – 昔、人々が集まって一緒に笑う場所だったの。

マックス – 笑う？

キム – 当時は合法だったのよ。何についてでも笑えたの。権力者についてもね。

マックス – 最高指導者についても？

キム – 自分自身のことでも笑えたのよ。

マックス – 幸いにも、そんな時代はもう完全に終わったね。

キム – その通りよ…。まさか今、また何か考えてるんじゃないでしょうね…。

マックス – 報告書を書きに行くよ。

マックスが退場する。キムが観客のほうに向かう。

キム – それで、皆さんの調子はどう？危険な症状は出ていない？抑えられない笑いはないわね？いいわ、そのまま良い行動を続けてくれれば、もうすぐ解放されるわよ。

キムが退場する。ドムとパットが戻ってくる。

ドム – 君は彼だと思う？

パット – 誰のこと？

ドム – サムだよ！彼がスパイだと思う？

パット – じゃあ、もう私のことは疑ってないのね。

ドム – ああ。

間が空く。

パット – あのカップル、あなた覚えてるでしょ？

ドム – どのカップル？

パット – 夫が奥さんにジョークを話して、二人で笑ってたカップルよ。

ドム – どうして僕が覚えてると思うんだ？

パット – あのカップル、それは私たちだからよ。

ドム – そうかもね。（間が空く）君、以前は笑ったことなかったのか？

パット – なかったわ。何が起きているのか理解できなかったの。まるで…何も制御できないみたいで…。ちょっと恥ずかしかったわ。

ドム – 分かるよ。初めてはいつもそんな感じさ。

パット – それで、あなたは？私の前に他の女性と笑ったことがあるの？

ドム – ああ。女性とも、男性とも。時には複数人で。

パット – 複数人で…？

ドム – 楽しかった？

パット – 私…分からないわ…。

ドム – 君は楽しんだよ。

パット – ええ…。

ドム – 一度経験すると、もう無しでは生きられなくなるんだ。

パット – それが怖いの。それに、それが理由で私たちはここに閉じ込められてるんでしょ？

ドム – そうさ…。向かい側に座ってた二人は警官だったに違いない。

パット – 彼らが私たちをここに連れてきたのよ。マスクをしてたけど、声で分かったわ。

ドム – つまり、君は分かってたんだ。

パット – ええ。でも、二人が笑っただけで、どうしてそんなに気にするの？

ドム – 笑いには破壊的な力があることを彼らは知ってるからさ。

パット – 破壊的？健康に悪いってこと？

ドム – 健康に悪いわけじゃない。むしろ、健康にはとても良いことだよ。それが危険なのは彼らにとってなんだ。

パット – どうして？

ドム – 何にでも笑い出すと、人はずっと騙されにくくなる。つまり、従順じゃなくなるんだ。笑いは反体制的なんだよ…。

パット – それで、彼らは私たちに何をするつもりなの？

ドム – 分からない。僕たちが怖いんだろう。

パット – 私たちが怖いって？

ドム – 笑いが伝染するからだよ。この流行が広がれば、彼らのシステムを破壊し、一緒に彼らを倒す可能性があるから。

パット – 私たちを殺すつもりだと思う？

ドム – その選択肢はすでに考慮済みだろう。でも、全員を殺すわけにはいかない。

パット – それで、どうすればいいの？

ドム – もう一つ話そうか？

パット – ジョークを？

ドム – どうせ死ぬなら、笑い死にするほうがいいだろ？

パット – 警告しておくけど、私、結婚してるのよ。

ドム – 心配するな、笑うのは浮気じゃないさ。

パット – 聞かせてちょうだい…。

ドム – じゃあ、こんな話があるんだ…。

パット – 待って、別の場所に行きましょう。誰かが聞いてる気がする…。

ドム – 君の言う通りだ…。僕の部屋に行こう。

二人が退場する。キムとマックスが戻ってくる。

サム – はい、ボス。これが私の報告書です。

キム – 内容があまりないわね…。何か抜け落ちてないかしら？

サム – 絶対にありません、ボス。

キム – 彼らはどこに行ったの？まさか逃げたんじゃないでしょうね…。

マックス – 部屋にいるはずですよ。

ドムとパットの大笑いが聞こえる。

キム – さて、これで分かったわね。

マックス – はい、確かに彼らはウイルスに感染しましたね。

二人の笑い声を再び聞きながら、少し気まずそうに、そして戸惑った様子で耳を傾ける。

キム – 君、笑ったことはある？

マックス – ないですよ。あなたは？

キム – 痛そうに見えるわね…。

マックス – 知りませんよ。さっき笑ったことがないって言ったばかりじゃないですか。また騙そうとしてるんですか？

舞台外から再び笑い声が響く。

キム – もう仕方ないわね。これ以上は無理だわ。彼らを当局に引き渡さなければ。

暗転。

第３幕

キムは黒いマオカラーのシャツを着たまま立っている。ドム、パット、そしてマックスは座っている。ドムとパットはまだ青、ピンク、または緑のガウンを着ているが、マックスは今や看護師の白衣を着ている。

キム – 親愛なる皆さん、まず最初に、ここに来ていただいたことに感謝します。

パット – 私たちには選択肢なんてなかったけど…。

ドム – 私たちは囚人だ！

キムは咳払いをし、何事もなかったかのように話を続ける。

キム – それでは、今日はグループセラピーセッションを行うためにお呼びしました。

パット – 尋問のことでしょ…。

キム – ここに到着してから笑いの発作に屈した方が二人いることは分かっています。これは、隔離が始まる前に一人が感染しており、もう一人が接触によってウイルスに感染したことを証明しています。

ドム – それが分かってるなら、なぜこんな捜査のふりをするんだ？

キム – 自ら罪を認めることがセラピーの一環なのよ…。

マックス – 笑い？僕たちが？笑いって何のことかさえ知らないじゃないか、みんな？

パット – いい加減にして…君がスパイだって分かってるのよ。

マックス – でも、本当に僕は…。

ドム – スパイとしてはかなりお粗末だけどな。

マックス – 分かったよ…。潜入捜査官かもしれない。でもスパイじゃない。スパイってのは、悪い側にいる時に言うんだろ？僕たちは正しい側にいるんだよね、ボス？

キム – この紳士はスパイではありません。彼は情報提供者です。

ドム – それで君は？君は一体何者なんだ？

キム – 私はあなたたちの「リフォーマー」よ。

ドム – リフォーマー？

キム – あなたたちを「再フォーマット」するためにここにいるのよ。

ドム – それがリフォーマーの意味じゃないだろ。

キム – 辞書で調べてみなさい、分かるわよ！

ドム – 君たちは辞書全体を書き直したじゃないか！でも、僕は古い百科事典のコピーを見つけて、これらの言葉が以前持っていた意味を知っているんだ。

キム – 今では権威がすべての言葉を定義し、国民の福祉を向上させる唯一の目的のためにそれを行っているのよ。

ドム – 君たちはすべてを書き直したんだ、聖書さえも！そして神を「最高存在」として描き直した！さらに、過去の痕跡を完全に消すためにすべての本を燃やしたんだ！

キム – どうやらいくつか見落としたみたいね…。少しは読んだようじゃない。

ドム – 今日読めるものはすべて画面に表示され、完全に君たちの管理下にあるネットワークを通じて配布されている。

パット – つまり、私たちを「再フォーマット」したいのね…。ハードディスクを消去して、君たちの OS をインストールするってことでしょ？

ドム – そしてウイルス対策ソフトも追加するんだろうな…。

キム – 笑いはとても中毒性が高いの。1 回笑ったら、また笑いたくなる。そして何度も何度も繰り返すようになるのよ。

パット – 笑いがドラッグだって言いたいの？

ドム – 少なくともハードドラッグじゃないだろうな。

キム – 笑いの依存性はアルコール依存に似てるわ。一度完全に断つことは難しいの。笑うのをやめることはできても、誘惑は常にそこにあるのよ。

マックス – 一度アルコール依存になったら、ずっとアルコール依存者だ。

キム – 君こそそれを一番よく知ってるはずよ。君は 10 年間リハビリ施設に送られたわよね。密かにお酒を飲んで、警察に自分を売り渡したのよ。

マックス – もう酒は飲んでないよ。

ドム – でも、よく食べるよな…。

マックス – じゃあ、このセラピーって AA ミーティングみたいなもの？

キム – その通りよ…「笑い依存者の会」のミーティングね。

パット – 目的は、密かに笑っている人たちを見つけ出すことなのね。

キム – その通りよ。

ドム – それをどうやってやるつもりなんだ？

キム – 面白い話をするわ。それで誰が笑うか見てみましょう。

パット – 分かったわ。スクリーニングテストみたいなものね。

ドム – その話で誰も笑えないと思うけどな。

キム – どうして？

ドム – 笑いを引き出すには、正しい雰囲気といい仲間が必要だからさ。

パット – それで、最初に笑った人が矯正キャンプに送られるって言いたいのね。

ドム – よくてそれだろうな。最悪の場合、処刑されるかもしれない。

キム – よく分かったわね。

パット – もう笑いが止まらないわ…。

キム – いいわ、それでも話をするわね。

マックス – みんなで聞いてますよ、ボス。

キム – ある男が鏡を見つけるの。そして鏡を覗いて、自分の姿を見て言うの。「あの野郎、前に見たことがある気がする…」って。そしたら友人がその鏡を取り上げて覗き込んで言うの。「そりゃそうだよ、それは俺だもん！」

マックス – 全然意味が分からない。

キム – それが面白い理由じゃないかしら？そうよね？

ドム – あと、それをどう語るかにもよるよ。

パット – そして、誰がその話をするかにもね。

キム – そう思うの？

パット – 笑ったら処刑されると分かってたら、それが助けになると思う？

キム – 助けにならないの？

パット – そりゃそうでしょ。

キム – なるほど…。じゃあ、こうしましょう…。最初に笑った人には「お楽しみ」をあげるっていうのはどう？

ドム – 「お楽しみ」？

ドムとパットが笑い出す。

マックス – 「お楽しみ」…

笑いが伝染し、マックスも笑い出す。

キム – なるほど、全員感染したわね…。

ドム – 「陽気な仲間で誰も否定できない…♪」

キム – （マックスに向かって）よし、君は本格的に隔離されるわね。

マックス – はい、ボス。

ドム – 最初に笑った人には「お楽しみ」…。

マックスは笑いを止めようとするが、止められない。

キム – それが面白い？

マックス – 全然面白くないです！いや、面白いけど…。

ドム – 見たろう、君だって頑張れば面白くなれるんだ。いや、むしろ頑張らないほうが面白いかもな。

全員が笑い続け、ヒステリックな状態に近づく。キムは不快そうで、笑いに恐怖を感じたように見える。

キム – 今すぐ笑うのをやめなさい！これは命令よ！

しかし、他の３人は笑いを止められない。キムは耳をふさぎ、急いで退場する。ドム、パット、マックスは徐々に笑いを収める。

ドム – さて、君も仲間入りだな。どうだい、どんな感じだ？

マックス – 笑うって？分からない…。痛いものだと思ってたけど、実際にはかなり心地いい。

パット – とても心地いいわ…。

マックス – それに、なんだかホッとする。

ドム – 考えてみれば、かつては公共の場で笑うことが許されていたなんてな…。

パット – どうしてこんなことになったのかしら？

ドム – 昔から徐々に始まったことさ。でも、少しずつ忍び寄ってきたんだ。まず最初に、特定のテーマについて笑うことを違法にしたんだ。最初は宗教…。

マックス – 次は当然、当局だな。

ドム – それから最高指導者を新たな神にして、どんな批判も冒涜とラベルを貼られた。

マックス – 次にアルコールを禁止した。飲酒すると笑いやすくなるからな。

ドム – 当局は笑ってもいいテーマのリストを発表した。でも毎年そのリストは短くなったんだ。

マックス – 最終的には、笑うこと自体を全面的に禁止するのが簡単だと決めた。

ドム – こうして、少しずつ、すべてのことについて笑うのが許されない状態から、何一つ笑うことが許されない状態になってしまったんだ。

マックス – 最終的には、自分自身についてすら笑えなくなった…。

ドム – 貧しい人たちですら、自分たちの状況を笑うことは許されなかったんだ。

パット – でも、どうやってそれを徹底させたの？

ドム – 当局は笑いを精神疾患のように扱い始めたんだ。笑っているところを見つかった者は即座に収容所に送られた。

マックス – そしてもちろん、笑いを引き起こす可能性のあるものをすべて禁止したんだ。

ドム – 新聞は禁じられ、劇場は閉鎖され、自己検閲が蔓延した…。

マックス – ピエロやコメディアン、俳優は危険なテロリストとして分類された。

ドム – 笑いは中世のハンセン病のように扱われたんだ。笑っているのを聞かれた人々の中には、自宅に生き埋めにされた者もいた。

マックス – それに加えて、全人口にマスクを着用させたんだ。

ドム – ウイルスから守るという名目の下でね。本当の目的は、ほんの少しの微笑みでも見られないようにすることだった。マスクは口輪のようになったんだ。

マックス – 昔の一部の宗教と似ているよな。

ドム – その後、権威が唯一の宗教になったんだ。

マックス – 少しずつ、人々の笑い声は消えていった。

ドム – 笑いが違法になれば、当然、批判や抗議も不可能になる。

マックス – 社会的な対立もなくなり、政治的な議論もなくなり、選挙もなくなった。

ドム – 多くの世俗的、宗教的な独裁政権ではすでにそうだった。

マックス – 権威はこの病気が完全に根絶されたと考えていたんだ。でも最近、いくつかの孤立したケースが再び現れた。君たちはその一例なんだよ。

パット – 私たちに何をするつもりなの？殺すの？

マックス – そうだね。でもまず、君たちは笑いを止めない笑い病の感染者で、治療不可能だから、実験に利用するつもりなんだ。

パット – 実験？

マックス – 大衆の反応を研究したり、この病気がどう広がるのか観察したり、笑いが健康な社会にどんな害を与えるのかを理解したり、そういうことだよ。

パットが観客を見つめる。

パット – つまり、私たちは彼らを笑わせる役目だったのね？

ドム – 僕たちが知っているのは、つまらないジョークだけだ…。

パット – 笑い方と人を笑わせる方法を再び学ばないといけないわね。

間が空く。

マックス – でも、もし最高指導者が私たちを見捨てたらどうなる？

ドム – 世界の終わりにはならないさ。むしろ新しい始まりだ。脳トレーナーは教授に戻り、リフォーマーは政治家に戻る…。

マックス – じゃあ、僕みたいな情報提供者は？僕は何もできないんだ！僕はどうなるんだ？

ドム – 何もできないなら、俳優になる資格は十分にあるよ。

暗転。

第４幕

パットが舞台を行き来しながら心配そうな様子で歩く。彼女は観客の方に向かう。

パット – 心配しないで、皆さんもすぐに解放されるわ。少なくとも、そう願っているけど…。

ドムが登場する。

ドム – 何か新しい情報はある？

パット – まだ何もないわ。外から小さな騒ぎ声が聞こえた気がする。でも音がすごくこもってるの。

ドム – 劇場はいつも防音がしっかりしてるからね。

パット – あのスパイはどこに行ったの？

ドム – ピザを平らげてる最中さ…。

パット – 私たちはまだここに閉じ込められていて、外の世界から完全に切り離されてるの。もう何日も外からのニュースがないわ。

ドム – 冷凍庫が空になったら飢え死にするさ。僕たちは笑い死ぬかもしれないなんて思ってたけど…。

パット – 生きてここから出られると思う？

ドム – ある意味、隔離される前からもう死んでたようなものじゃないか…。

パット – 確かにそうね。この何年も私たちが苦しんできた唯一の本当の病気は、「末期の憂鬱」だったわ。

ドム – そして笑いはむしろその解毒剤だよ。

マックスが戻ってくる。

マックス – 外から変な音が聞こえるんだけど…違う？

ドム – 違うな…。

３人が注意深く耳を傾ける。

パット – 待って…もしかして…すごく遠くからだけど…。

ドム – それは…爆発音みたいじゃないか？

マックス – 爆発？笑いの爆発ってことか。

キムが戻ってくる。彼は疲れ切った様子で、服が乱れている。手には「笑い禁止」の標識を持っている。それは、笑顔の絵文字に赤い線が引かれ、赤い縁取りの丸い紙でできている。

マックス – ひどい顔をしてるよ、ボス。何が起きたんだ？

キム – 状況が変わった…。

マックス – 良い方向じゃないみたいだな。

キム – 誰に聞くかによるわね。

マックス – 感染が拡大してるのか？

キム – 残念ながら、今や世界的なパンデミックよ。完全に手に負えない笑いの危機。全体的な制御不能な笑いの発作ね。町中で笑いの爆発が報告されているわ。

マックス – 本当にそんなに深刻なのか？

キム – 街角ごとに笑いが爆発してるの。警察は完全に圧倒されているわ。もっとひどいのは、多くの警官がすでに笑い死にしているの。息ができなくなるまで笑うの。脇腹が裂けるまで笑うの。お漏らしするまで笑うの。頭が飛ぶほど笑うの。ハイエナみたいに笑うのよ！床を転げ回って、涙を流して笑っているわ！

マックス – え、笑いながら泣くこともあるのか？

キム – 「多ければ多いほど楽しい」という表現を聞いたことがある？

マックス – ないけど。

キム – じゃあ教えてあげるけど、今はものすごくたくさんの人が笑ってるわ。

ドム – じゃあ革命が近づいてるんだな…。

キム – それよりもむしろ、権力体制が崩壊してるのよ…。当局は辞職して、最高指導者は国を去ったわ。

マックス – 最高指導者が？どこに行ったんだ？

キム – 彼はバチカンに政治亡命を求めたわ。あそこなら笑いに関連するものを感染する心配はないからね。

パット – それで、私たちをどうするつもり？

キム – 隔離を続ける意味はもうないわ。自由にしていいわよ。

ドム – ついに…。早く外を見たいよ。街角で笑う人々、公共交通機関で笑い合う人々、そして明日には、映画館や劇場でも笑い声が聞こえるかもね。

キム – 全然面白いとは思わないけど。

パット – そんなこと言わないで！一緒に思いっきり笑いましょうよ！

ドム – この話を聞いたことがあったら止めてくれ…。ある男が地球全体の笑いを止めようとしたんだ…。

マックス – でも結局、彼自身が笑い死にしちゃうんだよな。

全員が大笑いする。キムも緊張した笑いを始めるが、それが痙攣に変わり、彼女は地面に倒れる。パットが彼女に駆け寄る。

パット – 彼女、死んじゃったわ！本当に笑い死ぬことがあるの？

マックス – 最近報告されてるよ。当局のメンバーは、激しい笑いにさらされると即座に倒れるんだ。

ドム – だからこそ、彼らはこの感染を根絶しようと必死だったんだな。

パット – （マックスに向かって）でも、あなたは死んでないわよね。

マックス – 多分、少し前から信じるのをやめたからだと思う…。

ドム – ある意味、君はすでにワクチンを受けてたんだよ。僕たちと同じようにね！

パット – じゃあ、これで自由なの？

ドム – 何でも笑える自由を取り戻したんだ！

パット – 考えてみて、私たちは鳥インフルエンザか青島（チンタオ）ウイルスのせいでここにいると思ってたのよね。

マックス – これからどうする？

ドム – もう一度笑うことを学ぶんだ。もう一度生きることを学ぶんだ。

パット – ちょっと怖いわ…。

ドム – それが普通だよ。最初に自由を得た奴隷たちも、自由になって何をすればいいか分からなかったんだ。

マックス – じゃあ、また酒を飲み始めてもいいかな？

パット – もちろん！でも、もう必要ないって気づくかもね。

マックス – 素晴らしい！でも、ちょっと目眩がするな…。

ドム – ああ…。僕たちは死んだ奇術師のハトだ。

マックス – それはどういう意味だ？

ドム – 僕たちはマジックのトリックで生み出された存在なんだ。でも、僕たちを無から生み出した奇術師はもうここにはいない。そのトリックがどうやって行われたのか理解できず、自分たちの羽の使い方を完全には思い出せないんだ…。

パット – 素敵ね。

ドム – 詩だよ。

パット – 詩？

ドム – また禁止されていたものの一つさ。

パット – 他にもあるの？

ドム – たくさんあるよ！例えばオーガズム。君はそれが何か知らないだろ？

パット – ええ、もう言ったけど、私、結婚してるのよ…。

ドム – あとで君に見せてあげるよ、内緒でね…。見てごらん。オーガズムは愛にとって、笑いが知性にとって、くしゃみが風邪にとってのようなものさ。何も治さないけど、一時的な安らぎをもたらしてくれるんだ。

キムが意識を取り戻す。

パット – 見て、彼女は完全に死んでたわけじゃなかったみたいね。

マックス – もしかしたら、彼女も本当の信者じゃなかったのかもな。

キム – 私に何が起きたの？

パット – 笑いの発作を起こしたのよ。でも大丈夫、もうすべてがうまくいくわ。

マックス – ところで観客はどうする？彼らのことを忘れてたよ。

ドム – もう恐ろしい結果を気にせずに彼らを笑わせられるんだ…。

マックス – 本当にできるのか、ボス？

キム – ここは劇場なんだから。

ドム – 新しいジョークを作らないといけないな。

キム – そうね、だってまだあの鏡を見た男たちのジョークが理解できないもの…。

ドム – 違う視点で見ないといけないんだ、それは象徴的なんだよ。

キム – 象徴的？それは何？

ドム – ユーモアは鏡みたいなものさ。役者たちが観客に鏡を差し出して、自分自身を笑えるようにするんだ。

パット – その鏡の中に誰でも自分を見つけられるのよ。

ドム – 誰でもね。ただし、自分のしかめ面を映すその鏡を見たくなくて壊そうとする愚か者を除いてな。

マックス – じゃあ、笑おうぜ！

ドム – これが僕たちの自由だ。そして 20 世紀のあるコメディアンを引用するなら、自由を使わないと、自由を失うんだよ。

パット – 何事にも、誰とでも、いつも笑い合えますように…。

マックス – 今日すべてのことについて笑えなければ、明日には何も笑えなくなるからね。

マックスが「笑い禁止」の標識を掴み、それをキムの頭の上で叩き壊す。全員が大笑いする。その笑いは録音された笑い声で増幅される。暗転。

終わり。